2022年10月9日  川越教会

丸山　勉

感謝の声も泣く声も

［エズラ記3章1～13節］

第七の月になって、イスラエルの人々は自分たちの町にいたが、民はエルサレムに集まって一人の人のようになった。祭司たち、すなわちヨツァダクの子イエシュアとその兄弟たちは、シェアルティエルの子ゼルバベルとその兄弟たちと共に立ち上がり、イスラエルの神の祭壇を築き、神の人モーセの律法に書き記されているとおり、焼き尽くす献げ物をその上にささげようとした。彼らはその地の住民に恐れを抱きながら、その昔の土台の上に祭壇を築き、その上に焼き尽くす献げ物、朝と夕の焼き尽くす献げ物を主にささげた。書き記されているとおり仮庵祭を行い、定めに従って日ごとに決められた数を守って日ごとの焼き尽くす献げ物をささげた。その後、絶やすことなくささぐべき焼き尽くす献げ物、新月祭、主のすべての聖なる祝祭、主に随意の献げ物をするすべての人のために献げ物をささげた。第七の月の一日に、彼らは主に焼き尽くす献げ物をささげ始めた。しかし、主の神殿の基礎はまだ据えられていなかった。彼らは石工と大工に銀貨を支払い、シドン人とティルス人に食べ物と飲み物と油を与え、ペルシア王キュロスの許しを得て、レバノンから海路ヤッファに杉材を運ばせていた。エルサレムの神殿に帰った翌年の第二の月に、シェアルティエルの子ゼルバベルとヨツァダクの子イエシュアは彼らの他の兄弟たち、祭司とレビ人、および捕らわれの地からエルサレムに帰って来たすべての人と共に仕事に取りかかり、二十歳以上のレビ人を主の神殿の工事の指揮に当たらせた。イエシュアもその子らと兄弟たち、カドミエルとその子ら、ホダウヤの子らと一緒になって、神殿の工事に携わる者を指揮することとなった。ヘナダドの子ら、およびその子らと兄弟たち、レビ人も同様であった。建築作業に取りかかった者たちが神殿の基礎を据えると、祭服を身に着け、ラッパを持った祭司と、シンバルを持ったアサフの子らであるレビ人が立って、イスラエルの王ダビデの定めに従って主を賛美した。彼らも「主は恵み深く、イスラエルに対する慈しみはとこしえに」と唱和して、主を賛美し、感謝した。主の神殿の基礎が据えられたので、民も皆、主を賛美し大きな叫び声をあげた。昔の神殿を見たことのある多くの年取った祭司、レビ人、家長たちは、この神殿の基礎が据えられるのを見て大声をあげて泣き、また多くの者が喜びの叫び声をあげた。人々は喜びの叫び声と民の泣く声を識別することができなかった。民の叫び声は非常に大きく、遠くまで響いたからである。

[１] 私たちは「礼拝」したい

私たちは限られた時間の中を生きています。10/23の日曜日には「永眠者記念礼拝」を行うことになっていますが、皆それぞれの地上の人生の長さを生きました。そしていつかは分かりませんが、私たちも皆その列に加わる時があります。自分という存在は何者なのかと思わされます。今旧約聖書の「エズラ記」をご一緒に読んでいますが、そこでよく分かることは、人間というものは、神様への礼拝をしたい存在なんだということです。今「したい」と言う言葉を使いました。おかしな言い方ですが、食事をしたいように、時に温泉に入りたくなるように、私たち人間は神様を礼拝したい者なのだと思います。エズラ記、またネヘミヤ記を読んで行きますと、これまで異国の地で神殿を失い、神礼拝することがままならなかったイスラエルの人々が何を悲願としたのかと言うと、礼拝する神殿を‟再建”することでした。これは強制された訳ではありません。けれども彼らはまるでそれがなければ自分たちの存在が消えてしまうような思いを持って、その工事に取り掛かったのです。年月がかかり、途中では中断せざるを得ないこともあったようです。けれどもイスラエルの人々にとって、礼拝するということが人生の土台であったと言って良いと思います。それは神様と人間の「出会い」の場所です。

先週も申しましたが、神様の方が、私たちに出会続けたいのです。私たちの思いよりの先に、「あなたたちは私のもとに帰って来なさい」「私の名を呼びなさい」「重荷を下ろしなさい」、そのように呼びかけをして下さるお方がいらっしゃる。礼拝とはその神様の呼びかけを聞き、その懐の中に帰って行く行為です。ある伝統的な教派の考え方では、聖堂に入る事は、ある意味母の胎内に戻るようなものだという理解があるようです。私たちは自分が胎内にあったことなど覚えてはいない訳ですけれども、きっとそこでは深い安心感を与えられて眠っていたのです。礼拝とは、一面そういうことを意味するのではないでしょうか。礼拝において、私たちは本当の自分に戻る。そういう体験が出来たら良いな、と思います。

［2］ 礼拝の「基礎工事」が促されている

　エズラ記3章ですけれども、実はまだここでは、やっと神殿の基礎が据えられたという段階です。以前のソロモンが建てた神殿にはネブカドネツァル王によって火が放たれ、城壁は崩され、宮殿は灰燼に帰してしまった、とエズラ記の前の歴代誌下には書かれています。この神殿再建は「基礎」から立て直さないとならないということは、表面を取り繕うのではなく、基本的な立ち帰り、ゼロからの再出発を意味すると思います。それは大変な試練ですけれども、反面リセット出来るということでもあり、神様が本当に生きて私ともう一度出会って下さる、主が生きておられることを示して下さる、ということでもあると思います。

まずイスラエルの民がしたことは、神の祭壇を築き、モーセの律法に従って焼き尽くす捧げ物を主に捧げたという、行っていることは、荒野の幕屋で行っていたことと同じです。それは荒野でもどこでも神様がそこに臨在されるという神様のお約束に立つ行為でした。礼拝というのは、いつでも「まず神の言葉、神の約束ありき」なんです。決しておままごとじゃない、空しくない。彼らはちゃんと、あの出エジプトの出来事を想起し、仮庵の祭りも行いました。しかし6節を見ると、「しかし、主の神殿の基礎はまだ据えられていなかった」とあります。バビロン王は神殿の基礎までも砕いていたのですね。だからそこから作り直す。これは「悔い改め」ということではないでしょうか？根っこから立ち帰るということです。彼らは「礼拝出来ない痛み」を体験しました。その時間はある意味彼らを成長させたのだと思います。習慣ではない、礼拝の本当の意味を掘り下げることへと繋がった「恵み」もそこにあったのです。ですから私たちがもしこのコロナで「礼拝する心」を失わせることになってしまったら、本末転倒なのです。今は、このことを契機に、私たちの礼拝の基礎工事が促されている時なのだと思います。

［3］ 「一人の人のようになった」

私は今日の3章1節の言葉が気になりました。「民はエルサレムに集まって、一人の人のようになった」とあるこの言葉です。いい言葉です。私たちも時々こういう表現をしますね。「心を一つに」とか「一致団結」とか。けれども注意しなければいけないことは、もしもそれが上から押え付けられた様な一致団結であるのならば、‟この私と神様”という個人的関係ではなくなってしまうということです。上からの強制的一致は、戦時中がそうであったように、人間の心を失わせるものでしょう。これは共同体を作る時に、例えば教会であるならば、牧師とかリーダーはよくよく心得ていなければいけないことだと思いました。教会とは、人間的な、「仕切る者」と「仕切られる者」の集まりになってはなりません。私たちをまとめるものは、ただ、神様の恵み、イエス・キリストの慰めです。一人ひとりがその恵みを受け、慰められる。その集合体が教会です。「一人の人のようになった」とありますが、私たちは本当にはそうなれないバラバラな罪深い存在ではないですか！違いがあるのは当然です。無理やり協力接着剤でつっくけなくてよい。私たちはただ十字架のイエス様のご愛と赦しのもとで緩められて繋ぎ合わさられているだけです。それが尊いのです。ですから基礎が据えられた時、そこにいた者たちは、ラッパを持った祭司とシンバルを持ったレビ人と共に、主を賛美したとありました。11節「主は恵み深く、イスラエルに対する慈しみはとこしえに」。ただ主の真実を歌っているのです。自分の感情を歌っているのではなりません。

まだ基礎工事が出来たばかりです。でも「基礎」と言うのは神様の愛ですから、私たちの時代で言えばイエス・キリストの十字架、そして復活という福音こそが基礎ですから、それが据えられれば、ある意味、建物は付属品です。たとえ火事で焼けたって、「教会」そのものが消えるわけではない。「主は恵み深く、その慈しみはとこしえに」です。私たちの主イエス・キリストはいつまでも変わらないお方です。

私は、色んな心を抱えているその私たち一人ひとりが、キリストの体の一部（肢体）とされていることを感謝し、喜びたいと思います。11節の後半を見て頂くとこう記されています。―「主の神殿の基礎が据えられたので、民も皆、主を賛美し大きな叫び声をあげた。昔の神殿を見たことのある多くの年取った祭司、レビ人、家長たちは、この神殿の基礎が据えられるのを見て大声をあげて泣き、また多くの者が喜びの叫び声をあげた。人々は喜びの叫び声と民の泣く声を識別することができなかった。民の叫び声は非常に大きく、遠くまで響いたからである。 」

　ここにあるのは、とても自由な心です。若い者も年を重ねた者もいる。そして主への感謝の声があり、喜びの叫びが上がり、しかし、そこにはまた泣くことでしか表現できない自分の心の表れがある。みんなここで、素直になっている。取り繕っていない。神様がおられるからですよね。

昨日夕方、教会に、ある女性からお電話がかかってきました。ホームページで川越教会の電話番号を知ってかけて下さいました。「もう死にたくなって電話をしました」と仰るんです。お話を聴きました。半生をお語り下さり、お聴きして、それは厳しかっただろうと思い、聴くだけでこちらも辛くなってきました。私は「あなたの死にたいという気持ちも分かる気がします。でも、誰でもこの地上の生涯が終わる時があるのだから、今は死なないで欲しい。あなたほどの辛い人生を歩んできた人を神様は見離すことは絶対にないですよ。大丈夫。イエス・キリストというお方はどん底を知っている方ですから、その方にお祈りして下さい。私も〇〇さんのためにお祈りしますから」と言いました。その方はクリスチャンではありません。けれども教会のことも聞いて下さって、最後の方は涙声も交じりながら、電話を切られましたけれども、私は本当に、神様は、人間の色々な感情も、閉じ込められたような思いも、全部ご存じのお方だと思います。そのような私たちを本当に招いていて下さっている！旧約の時代には「神殿」。今この時には、主イエス・キリストがご臨在下さっている「主の家」である「教会」。私たちの地上の礼拝は、私たちがそれこそ「永眠」するまで続くのです。私たちが、あと何回礼拝を捧げられるのか誰も分かりませんが、一度でも多く「感謝」「賛美」「悔い改め・立ち帰り」を経験しながら、神様に愛され、赦されているお互いとして「礼拝者」として生きて行きたいと心から願います。お祈り致します。

「主は恵み深く、その慈しみはとこしえに」…。